

イチイからたどる「飛騨のなりたち」 ー飛騨の伝承文化に学ぶー

岐阜県立益田清風高等学校

地域研究

（岡崎愛音、熊崎萌恵、熊澤流維、黒木翔太、酒巻友、佐久間葵、中島柚葉、野中ひかり、二村優真、細江康太、松井夕乃、山内彩未、脇坂美帆、渡邊亮介、阿部凌治、伊藤輝、今井歩、今井颯太、熊崎瑠伊、杉山ころこ、谷本千春、中島朱佑、野中沙莉那、林杏南、林茉由華、安江里奈）

応募の動機

私たちの学校の敷地にはイチイという木が並んでいる。「地域研究」の授業で、昔この木で作った笏を天皇に献上したとき正一位の位を授かったという伝承があり、イチイには「一位」という意味や歴史があることを学んでとても驚いた。そこで、飛騨の伝承や現在に残る文化の研究を通じて、未知の「飛騨のなりたち」进行研究しようと思った。

研究レポート内容紹介・今後の課題

「飛騨のなりたち」进行研究するにあたり、「飛騨と中央の関係がどのようなであったか」という視点で文献調査を行い、次の5つのテーマに分かれて現地調査を実施した。

① 「両面宿儺」の伝説

『日本書紀』には、「両面宿儺」という一つの体に二つの顔と各4本の手足に弓矢をもつ飛騨の怪人が、朝廷軍に討伐されたという記述がある。一方、地元の伝承では宿儺は斧を持って出現したとされ、宿儺の開創と伝わる寺院もある。斧には木を切り開き、国を拓くという意味が込められていると考えられ、良き指導者としての伝承が残っている。

② 飛騨の馬と紙絵馬

飛騨という字には「馬」が入っている。これは飛騨がかつて良馬の産地であったことに由来し、天皇に神馬を献上した伝承などが残っている。現在では、家庭や商店の玄関に紙絵馬という馬の絵が描かれた大きな紙を飾る文化があり、飛騨と馬のつながりが残っていることがうかがえる。

③ 飛騨工

奈良時代の飛騨国は、一部の税が免除される代わりに、毎年多くの男性が木工として都に徴発され労働に従事した。飛騨工とよばれた人々のすぐれた木工技術は『今昔物語集』に語り継がれている。飛騨工が実際に歩いて都に向かった東山道飛騨支路は、現在も石畳の残っている箇所があり、当時の飛騨工の苦労を垣間見ることができる。

④ イチイと一位一刀彫

笏木献上の古例は、現在も天皇陛下即位の際に飛騨一宮水無神社からイチイの笏木を上納する慣例として残っている。また、飛騨では江戸時代に一位一刀彫という伝統工芸が成立した。イチイの素材を自然のままに彫った木工品は、色を使わず木目の美しさを活かしており、寒い土地に育つイチイの素材ならではの特徴がそれを可能にしている。

⑤ 飛騨河合と山中和紙

中世の皇室や将軍には、飛騨国から和紙が献上されていた。飛騨で作られる丈夫で上質な和紙を、地域外の人には飛騨紙とよび、地元の人は山中和紙とよんだ。飛騨市河合町は町全体が豪雪地帯の険しい山地で農業に適さなかった。そのため、この気候や地形を利用して作られるのが山中和紙であり、現在まで受け継がれている。

以上の調査を進める中で、5つのテーマに共通する背景として、飛騨は山に囲まれた森林の多い雪国であるという地形的・気候的な特徴のつながりを見つめることができた。この環境の中で生まれた人々の暮らしや文化こそが「飛騨のなりたち」であると考えられる。さらに、それぞれに共通する課題として、伝承文化を継承する担い手が減少しているという現状があった。今まで消えることなく受け継いできた文化を、私たちの手で次に残していきたい。



山桜神社で紙絵馬製作の様子を見学



一位一刀彫工芸士の津田さんにお話を聞く

知られざる深良用水の恩恵

～深良用水の恩恵は深良(裾野市)だけではなかった。～

静岡県立沼津城北高等学校
情報メディア部 用水班
(小塚岳飛、柿島蒼良)

応募の動機

水に恵まれず田畑が増やせなかった深良村（現静岡県裾野市）に、満々と水を湛えた芦ノ湖から箱根の外輪山に隧道を掘り、深良村に水を引き、田畑を増加させた深良用水に興味を持ち研究を始めました。その研究の結果、深良用水の恩恵を受けている地域は深良だけではなかったのも、そのことを多くの人達に知ってもらいたいと思い応募しました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

- | | |
|-----------------|----------------|
| 1 はじめに(テーマ設定理由) | 2 深良用水のアンケート実施 |
| 3 深良用水特別展示 | 4 深良用水の調査 |
| 5 まとめ(結論) | 6 参考文献 |
| 7 深良用水関係年表 | |

今回の研究では次のことがわかりました。

「深良用水」の水が流れているのは、現在の裾野市だけではなく、御殿場市・駿東郡長泉町・駿東郡清水町であることがわかり、そして「深良用水」の末端は、竹原村・伏見村・新宿村（現在の駿東郡長泉町竹原・駿東郡清水町新宿・駿東郡清水町伏見）であることがわかりました。

井組三郷、井組29ヶ村（最初は30ヶ村）の存在もわかりました。上郷（深良村・岩波村・神山村・上ヶ田村・金沢村・葛山村・御宿村・千福村・定輪寺村・富沢村・一色村、11ヶ村）、中郷（石脇村・佐野村・二ツ屋新田・久根村・公文名村・稲荷新田・茶畑村・平松新田・麦塚村、9ヶ村）、下郷（伊豆島田村・水窪村・納米里村・上土狩村・中土狩村・下土狩村・竹原村・本宿村・伏見村・新宿村、10ヶ村）合計30ヶ村。（1707（宝永4）年本宿村が脱退し、それ以後近世を通じて29ヶ村で存続します。）

また、「深良用水」は、箱根の外輪山にトンネルを掘って、外輪山の内側にあつて豊富な水を湛えている芦ノ湖の水を西側の山麓へ出し、それをいったん黄瀬川に流し込み、その黄瀬川の各所に水を取り入れるための堰を設けて灌漑用水を引水するものです。したがって、単に河川の上流部に堰を設定し、そこから導水のための水路を平野部に向けて作るだけの工事ではなく、第一に外輪山に長いトンネルを掘り抜くこと、第二に黄瀬川への合流によって再度堰から引水して分配することの二点において大きな特色をもち、当時としては画期的な大土木事業であることもわかりました。

さらに、「深良用水」の恩恵を受けている地域は、現在の裾野市だけではなく、現在の御殿場市、長泉町、清水町であることがわかりました。

その中で、特に下郷に属していた地域が「深良用水」の恩恵が大きいことがわかりました。調査した資料によれば、村数では上郷が最も多いのですが、水掛け面積では下郷の方がはるかに多く、深良用水掛りの半分は下郷の地域（伊豆嶋田・納米里・水窪・上土狩・中土狩・下土狩・竹原・伏見・新宿）ということになります。ようするに、「深良用水」の恩恵を最も受けているのは下郷地区ということが出来ます。下郷のための「深良用水」と言ってもいいと思います。

「深良用水」という名称なので、深良村、現在の裾野市深良のイメージが強く、他の地域はほとんど知られていないのですが、その恩恵を最も受けているのは下郷地区（伊豆嶋田・納米里・水窪・上土狩・中土狩・下土狩・竹原・伏見・新宿）だったのです。

用水の確保については、上郷・中郷・下郷で同じではなく、特に黄瀬川に設定された深良用水掛の堰としては最下流に位置する大堰にたよっている下郷は水確保のために大変な努力をしなければならませんでした。それが江戸時代を通じて何回となく繰り返された水論として現象しました。いずれも下郷が上郷を訴える形ではじまっており、下郷のおかれた状況をよく示しています。

下郷、特にその中でも用水掛りの下流部を形成する五ヶ村（中土狩、下土狩、竹原、伏見、新宿）は、その水論の成果として残された判決文（裁許状）を大切にしていたのです。今日まで絶えることなく続けられてきた、いわゆるゴサイキョ（御裁許）と呼ばれる裁許状その他の共有文書の虫干しにはそのことがよくあらわれています。1年に1回（2019（令和元）年は8月18日に竹原区が当番で開催されました）、各村の役職者立会いのもとで虫干しをした後、帳箱に文書を取り、厳重に封印をして、保管するのです。それは下郷が団結して闘い、獲得してきた成果を再確認する場であり、その再確認を通して連携を強めようとするもので、単なる虫干しではないことは明らかです。

このようなことから、下郷五ヶ村（中土狩、下土狩、竹原、伏見、新宿）が「深良用水」の恩恵を強く感謝していたことがわかり、また「深良用水」の恩恵を忘れないで、後世に伝えたいという思いが強く感じられます。

しかし、現在、下郷地域に住む人たちが「深良用水」の恩恵をどれだけ知っているのでしょうか。ほとんどの人が知らないと思います。今後、私たちは、現在の下郷地域の人たち、さらには全国の多くの人たちにこのことを知ってもらいたいので、「深良用水」に関する研究発表をする機会を作って、全国に発信していきたいと考えています。



芦ノ湖水神社
毎年8月1日に祭典が開催される



深良用水
下郷地域を灌漑している大堰

出雲の神話が語ること

東京・香蘭女学校高等科

出雲研修

（伊倉葉月、石坂莉沙、風間友紀、木村瑛香、響田美紀、小面柚茉、佐藤美季、新保友菜、谷口舞優、國保理央、光造由梨、安田佳那子、植本文菜、葛西美嘉、佐野生莉、渋谷佳乃、曾山ももこ、當間朱莉、湯本葉留）

応募の動機

選択授業等で『古事記』の神話について学ぶうちに、多く疑問点を持つようになりました。神話は創作なのか事実なのか、また何か意図があって語られているのか、そこで実際に神話の舞台となった出雲を訪れて現地で学ぶことで新しい発見ができるのではないかと考え、研修を行い、その成果をレポートにまとめ、応募しました。

研究レポート内容紹介

『古事記』『日本書紀』『風土記』などの神話を読み進めていくうちに、記紀神話の共通点・相違点、出雲と大和との関係などが見えてきました。また、神話が物事の始まりを語るものであることもわかりました。例えば、出雲神話では「和歌」の始まりが語られていたり、多くの地名譚も出てきました。地名譚の要素を持つ『風土記』の「国引き詞章」からは、古代出雲の中心地や支配領域がわかり、三瓶山から美保まで島根半島の両端を訪れるフィールドワークを行うことにしました。

そしてそれは、期せずして、明治時代に出雲で過ごしたラフカディオ・ハーンの足跡をたどる旅ともなりました。ギリシャで生まれたラフカディオ・ハーンは帰化し、小泉八雲と名乗りました。近代化する前の日本を愛していた彼は、日本人の妻から神話をたくさん聞かせてもらうなどして日本文化への関心をさらに持ち、出雲や隠岐を旅しました。

神話とフィールドワークが結びついた結果、加賀の潜戸では、美しい景観が神話を造らせてしまうこともあると感じるなど、いろいろな発見がありました。出雲の中心はかつて意宇にあり、国府や神魂神社の付近に国造家もありました。熊野大社もあり、現在も出雲大社の御食のために火を提供する鑽火祭が行われています。また、神在月とは、もともと竜蛇様が海から来ることに由来していたことと、その信仰の中心は佐太神社にあったのではないかとということもわかってきました。今でこそ、出雲大社が出雲の中心となっているけれど、過去には熊野や佐太の神様の存在が大きかったことがわかります。

荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡、西谷墳丘墓など弥生の遺跡が多くあり、さらに出雲大社の直近にある命主社から出土した勾玉もまた、弥生またはそれ以前の古層の信仰を想起させ、ヤマト政権成立以前からの王権の存在が確認できました。それだけの王権だからこそ、ヤマト政権は、出雲王権に国譲りをさせる必要がありました。

王権は国譲りを行いながらも、宗教的権威は保ち、その中心地を遷し、今の出雲大社と祭祀が形成されていきました。出雲大社にも神仏習合の時代があったことや、戦後に入ってから祭りの在り方などが変化していることもわかりました。

今後の課題

私たちが今見ている出雲は、昔からずっと変わらず存在するものではなく、時代によって少しずつ姿を変えながら今に至っていました。その変遷を、時代時代の切り口を探して、もう少し調べていきたいと思います。また、出雲と大和の関係にも迫り、なぜ神話が語られてきたかという意味もまだ探していきたいです。



出雲大社瑞垣の内を権宮司千家和比古氏によりご案内いただく



小泉八雲旧居にてハーンの曾孫である小泉凡氏のお話を伺う

幻の甚目寺飛行場

～戦後74年目 証言を聴く～

愛知県立杏和高等学校
歴史研究グループ
（橋本隆良、瀧波愛翔）

応募の動機

戦争が終わって74年が経ち地元の戦争について調べていたところ自分の住んでいる近くに甚目寺飛行場というものが存在していたことが分かりました。こんなところに飛行場があったことなんて自分たちはもちろん知りません。また、飛行場があった近くに現在住んでいる人さえその存在を知らないことが多いです。調べていくうちに地域の戦争の記録として残していきたいと思って応募しました。

研究レポート内容紹介

1、資料集め

まずインターネットで甚目寺飛行場のことについて調べました。その後、唯一残っている文献を手に入れ概要を把握することができました。また、新聞記事からも資料を集めました。突然、軍の命令で当時育てていた麦を全部刈り取り整地して飛行場ができたことがわかりました。

2、実際に飛行場後に行ってみる

友人と夏休みを利用して実際に飛行場跡に行きました。行く前に航空写真から確認はしていたが行ってみると想像以上に広く現在よりも重機や技術が発達していなかった時代にほとんど人の手で作られたと思うと想像ができませんでした。唯一残っている作戦司令室跡にも行きました。四角い穴があり中に入ってみようとしたのですが草やゴミで奥までは行けませんでした。

3、当時中学生の方から聞き取り

実際に当時中学生で飛行場建設に携わった方4人から2時間半にもわたって話を聞くことができました。当時は食料に飢えていたり外で逃げ遅ればアメリカ軍の飛行機から銃撃を受けたりと生きるのに必死だったそうです。そんな苦しい生活を送っているにも関わらず当時中学生の方たちの一番の思い出は「食事当番」でした。強制重労働がなくたまに当時では貴重な豚肉などをもらえる食事当番が楽しかったそうです。人間にとって食べることは大切なことなんだと改めて教えられました。玉音放送や当時使われていた教科書、本物の銃弾を見せてもらいました。自分たちにとってすべてが初めての経験でした。実際に銃弾を手に取りさせてもらいました。持ってみると想像以上に重くずっしりきました。こんなものが当たったら本当に即死するんだと思いました。話を聞いているうちに命の大切さを学ぶことができました。生きたくても生きることができなかった当時の人たちのためにも命を大切にしないといけないと思いました。



甚目寺飛行場司令塔跡



聞き取りの様子

今後の課題

今回調査することができなかった戦場に行った人の聞き取り、当時麦を育てていた人の思い、戦後どうやって農地に戻されたかの証言を聞き記録として文章に残すことです。戦争が終わるまでの約10か月だけ存在した幻とも言われる甚目寺飛行場、唯一残っている作戦司令室跡があること、戦争の記憶を風化しないためにもこれからも調査を進めていきたいと思っています。

因幡の手笠踊りについて

鳥取県立八頭高等学校
因幡のカサ踊り研究会
(村田海人、前場百合菜、細川由希子)

応募の動機

岩美郡宇部野村美敷地区（現鳥取市国府町美敷周辺）には雨乞い踊りに由来する「因幡の手笠踊り」（笠は被り笠のこと）が伝えられており、明治の終わりに「因幡の傘踊り」（長柄の傘を使用）に発展したともいわれる。しかし、大正初期に行われた美敷水源地の堰堤工事の中で、山形県から伝えられた「花笠踊り」がもとになったという伝承もある。この「花笠踊り」起源説について検討してみた。

研究レポート内容紹介・今後の課題

大正7年(1918)9月、台風の際に美敷水源地の土堰堤が決壊し、死者8名を出す惨事となった。大正8年(1919)から大正11年(1922)に行われた美敷水源地の復旧工事で、山形から来た人物（詳細は不明）から美敷在住の宇田川米蔵氏が花笠踊りを習い、美敷で手笠踊りが始められたという（以下「因幡の手笠踊り」とする）。戦前から美敷青年団の「因幡の手笠踊り」は有名で、昭和22年(1947)、昭和天皇の山陰行幸において、天覧も行われた。しかし、昭和35(1960)ごろには兼業農家が急増し、踊りを行う集落は減少していった。現在は神垣手笠踊り保存会、神馬手笠踊り保存会、宮下地区手笠踊り保存会などいくつかの保存会が踊りを継承している。

動画をもとに踊りの所作を分析すると頭の上で水平に笠を前後する、二人組の踊り手が入れ替わる（「切り合い」という）、体の真正面で上下に笠を動かす動作、見得を切る動作などが共通する。特に踊りが「切り合い」に入るとホイッスルを鳴らすなど「因幡の傘踊り」と共通点が多く、強い影響が感じられる。また、踊り唄は「鴨緑江節」「浪花節」など大正時代に流行したもので、「因幡の傘踊り」で使用されるものと完全に一致していた。「因幡の手笠踊り」固有の踊り唄は確認できなかった。

なお、山形県の「花笠踊り」は大正8年(1919)～大正10年(1921)の村山郡尾花沢市の貯水池徳良湖の築堤工事の最中に、菅笠を使った笠踊りとして踊られたのが始まりであり、紅花造花を使った「花笠踊り」は大正11年(1922)の工事完成祝いのパレードで完成した。「花笠踊り」が成立した時期は美敷水源地の工事とほぼ同時期である。「花笠踊り」についてはインターネット上の動画で所作を確認したが、「笠回し」（笠を体の前で回転させる動作）などは「因幡の手笠踊り」と共通している。

以上の調査結果から「因幡の手笠踊り」は山形の「花笠踊り」の刺激を受けて成立したと考えられる。さらに、「因幡の手笠踊り」は先行する「因幡の傘踊り」（明治32年成立）の影響を受けて現在の踊りになったのではなかろうか。なお、「因幡の手笠踊り」が大正時代初期（大正8年～11年）に成立したならば、明治時代末期に成立している因幡の傘踊りの原形にはならない。よって、「因幡の手笠踊り」および「因幡の傘踊り」が雨乞い踊りに由来するという説はなりたたない。

踊り唄や踊りの所作から考えて、美敷水源地の堰堤工事より以前に「因幡の手笠踊り」が存在していたとは考えられず、山形県から伝わったという説は有力と思われる。現在の踊りはホイッスルの使用や踊り唄など「因幡の傘踊り」の影響を強く受けている。

大正時代初期に多くの青年団が「因幡の手笠踊り」「因幡の傘踊り」を開始し盆踊り改良に取り組んでいる。その原因は何か調査してみたい。



宮ノ下地区手笠踊り保存会
(2019.8.24 因幡万葉歴史館)



神垣手笠踊り保存会の皆さん
(2019.9.8 鳥取市国府町神垣公民館にて)



手笠踊りの指導
(2019.9.8 鳥取市国府町神垣公民館にて)

民具を活用したレクリエーションが 参加者に与える影響

鹿児島県立屋久島高等学校 3年
中 島 渚

応募の動機

2年生の環境コースの研修で屋久島町歴史民俗資料館を訪問した際に民具と出会い興味を持った。屋久島の民具調査が行われた30年後の現状を調査し、その結果から消えゆく民具の活用方法の一つであるレクリエーションを実施し参加者に与える影響を調査した。その調査結果をより多くの人に伝えたいと考え応募した。

研究レポート内容紹介

研究1 民具に関するアンケート調査

民具の認知度、使用、保管、廃棄状況について高校生134人、大人56人を対象に調査した。その結果、高校生が見たことある民具で多かったのは、餅つき体験やイベントで見たイシウス・キネ、センバで、大人が現在も使用しているのは、タケボーキ、ナタ、クシ、ソケなどだった。しかし、ゴブランブ、クラ、ヒラギワイ、モミトオシなど多くの民具が使われなくなっており、民具は古くなった、置き場所がない、使い道がないなどの理由や使用者の死亡、家の改築をきっかけに廃棄される実態があった。この状況が続けば、民具は生活から消え昔の暮らしを知る貴重な財産がなくなる可能性がある。そのため、消えつつある民具を保存し、新たな活用方法を探ることが重要である。この結果を受け、研究2を実施した。

研究2 民具を使ったレクリエーション

民具がレクリエーションの参加者に与える影響を探るために高齢者30人、高校生9人、施設職員5人を対象に民具を活用したレクリエーションを1時間行った。運営に携わる人とは事前に打ち合わせを行った。内容はスライドに民具を投影し、使用の有無を○・×カードで提示してもらったり、箱の中にある民具の名称を触った感覚だけで当ててもらったりするクイズを行った。またグループ活動で思い出のある民具について写真をもとに高校生に語ってもらい、最後にアンケート調査を行った。

レクリエーションの効果として、高齢者にとっては、若い世代との交流の場となり気分の高揚から記憶が再生され、笑顔や口数が増加し、昔の暮らしを教えたいという気持ちを高めた。高校生にとっては、高齢者世代との交流の場となり、民具を活用した良い効果を実感し、昔を知る満足感につながった。施設職員にとっては、昔を学ぶ場となり、日ごろ支援する高齢者を理解するきっかけとなった。民具が高齢者に与える効果を実感し有効な支援の一つとして認識したことがあげられた。今回の研究では、使われなくなった民具の活用法として回想法を取り入れたレクリエーションを実施した。その結果、参加した高齢者だけでなく、高校生、施設職員などの第三者にも良い効果が見られた。



民具を活用したレクリエーションの様子



レクリエーション後のアンケート調査

今後の課題

今後の課題としては、レクリエーションで使用する民具の種類を増やしたり、参加者の居住区域を広げたりして効果を検討してみたい。また、民具の新たな活用方法を探り、今後レクリエーションで活用するための民具を収集し保存するための有効な方法も検討していきたい。

高田富士考

—新宿区のともしび 地域性を追いかけて—

東京・東洋高等学校 3年
八 木 つきの

応募の動機

民俗学の魅力に惹かれ、大学ではそれらを学んでいきたいと漠然と考えていた時、民俗学を専門にされている国語科の先生に出会った。先生から研究の話をたくさんお聞きするうちに、次第に私自身も研究を行ってみたいと思うようになった。そこで、東京都新宿区で生まれ育った私だからこそ見い出せる都市の伝承を調べていくことにした。

研究レポート内容紹介

古くから、畏怖されたり崇められたりする存在として日本人の生活に根付いていた富士山は、江戸時代になると「富士講」という形で現れる。富士講が組織された背景には、相次ぐ災害や飢饉による生活必需品の物価高騰に苦しむ庶民の姿があった。後に富士講は、「江戸八〇八講」と呼ばれるほど盛んになるが、時代を経るとともに富士講の伝承は極めて困難な状況になっていった。そのような状況であっても、新宿区西早稲田では地域との繋がりを活かすことで、現在も活動を続けている「丸藤宮元講社」の灯りがともしり続けている。

聞き書き調査で地域と富士講・富士塚の繋がりを追跡していくなかで、地域による認識の格差を実感した。同じ新宿区に住んでいるにも関わらず、富士講や高田富士について全く知る機会がなかったのだ。富士祭りでは、自分よりはるかに小さな子供たちでも、山開きの日だけ富士塚が開くことを知っていて、「富士塚に登りに行こう」「鐘を鳴らしに行こう」といった言葉が飛び交っていることに大変驚いた。区内であっても、これほどまでに認識に違いがあるのは、高いビルが立ち並ぶ景色の中で、伝承されている物の存在を気にする機会が減多にないことや、地域ごとの活動は盛んだが、地域間の交流があまりみられない新宿区の特徴にあるように思える。

そして聞き書き調査で最も実感させられたことは、聞き書き調査に協力して下さった丸藤宮元講社の先達である井田三郎さんは、富士講の研究を通して出会い、一人では辿りつけなかった高田富士に導いて下さった私にとっての先達である、ということだ。またその先達としての姿は、「丸藤宮元講社の先達は自身が最後になるかもしれない」と考えているからこそ、最後まで富士講の伝承を途絶えさせないように出来る限りのことを続けていこうとする、強い覚悟を感じるものだった。こうした姿こそが、東京・新宿において、富士講の伝承を残すことができた理由の一つだと考えられる。



山開きの日には富士塚に登れる。入り口から奥へ丸藤宮元講社の講印の書かれた提灯が続く。



富士塚の山頂へ続く登山道。決して楽な道のりではなく険しい勾配が続き、まるで富士登山をしているかのように思わせる。

今後の課題

富士講の多くが姿を消しつつあり、それは食行身禄の弟子である高田藤四郎より続く丸藤宮元講社も例外ではない。現在の生活の中に、改めて富士信仰を定着させることは難しいが、富士講の歴史を知識として伝承することはできるはずだ。災厄や困難な世情を人々が知恵や工夫をこらして乗り越えてきたことを学ぶことは、先が見通せない現代で問題に直面した時に、これらの伝承が手助けになって人生を豊かにすることに繋がるはずだ。そのために私が出来ることは、富士講や富士塚とそれに興味を持つ人々の間を繋ぐ「仲介者」になることだと考えている。

白雲座の地歌舞伎

～地域の伝承文化を学び、受け継ぐ～

岐阜県立益田清風高等学校 2年

田口真江

応募の動機

私は、地域や家族の影響により、小学生の時から地元の舞台「白雲座」の地歌舞伎に携わってきました。先生の勧めもあり、白雲座歌舞伎の歴史や保存会の取り組みを深く知るため、史料調査や、関係者への聞き取り調査を行うことを考えました。また、これまでに出演してきた演目（芸題）の内容や自分の役柄を再確認するため、このレポートを作成しました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

江戸時代に建設された白雲座が、現在の劇場型舞台に改修されたのは、明治23年（1889）2月のことで、同年3月27日には興業が行われたことが記録されています。明治から大正時代には県内の他地域と同じように地歌舞伎が大流行しましたが、昭和に入ると下火になり、建物は地歌舞伎舞台としての使用もされなくなりました。しかし、建物の国重要民俗文化財登録を契機に昭和53年（1978）地元の有志による保存会が結成されました。演目（芸題）の練習方法、建物や舞台背景などの保存修理、後継者の育成など、いくつかの課題を克服しながら現在まで毎年白雲座歌舞伎公演が行われています。

白雲座の建物内部は、観客席が舞台に向かって緩やかに下がっていて、舞台を見やすくする工夫がされています。舞台にある回り舞台は、地階で心棒を回すことによって場面転換が行われます。地階には楽屋や花道への移動通路があり、合理的な構造となっています。また、舞台から楽屋へ降りる階段には小学校で使われていた階段を再利用する等、歴史と工夫がみられます。

公演の練習は、毎年公演前の一ヶ月に集中して行われます。地元保存会の活動は、地域の結びつきを確認する活動にもなっています。少子高齢化が進む地域で後継者を育成することは大きな課題ですが、小学生の時に「子ども歌舞伎」を経験した若い世代が、先輩たちから指導を受けながら地域の文化を引き継いでいます。近年は県の観光政策として地歌舞伎が注目されるようになってきており、白雲座以外でも公演を行う機会が増えてきています。

このレポートの作成を通して、身近な存在であった白雲座の歴史や特徴を詳しく学ぶことができ、地域の文化財としての価値を知りました。また、小学生時代からの自分自身の体験を振り返り、まとめていく中で、地歌舞伎の魅力を再確認することができました。さらに、地域の人たちから話を聞くことで、先人の努力と労力、その積み重ねによって現在の白雲座歌舞伎が成り立っていることを実感することができました。お忙しい中、取材に協力していただいた皆さんに感謝します。

自分が暮らす地域の文化を深く知ることで、地域の良さを再確認することができました。これからも地域の人たちとともに白雲座歌舞伎に関わっていきたいと考えています。



白雲座歌舞伎保存会員から話を伺う（2019年6月13日）



令和元年度公演を終えて（2019年11月3日）

地域行事の継承の問題とこれから ～屯倉村祭囃子の研究から創る地域の未来～

愛知県立杏和高等学校 3年
熊 沢 咲 良

応募の動機

地域行事に参加したフィールドワークをきっかけに、地域の活性化について研究したいと考えました。そこで、小学生の頃に参加していた屯倉村祭囃子が5年前になくなってしまったことを受け、「自分が参加していたお祭りは何であったのか」を調べるとともに、「なぜ終わってしまったのか」を解明し、継続するための解決策を考えるために研究をすることにしました。そして研究を始めた頃、このコンテストを見つけ、応募しました。

研究レポート内容紹介

1 屯倉村祭囃子について

当時の様子と文献を照らし合わせ、担い手や様子の変化を調べました。さらに屯倉天王夏祭が行われていた屯倉社の近くにあるお寺の長福寺の住職さんや毎年お祭りに参加していた三宅小学校の校長先生に聞き取りをして、なくなってしまった原因を考察しました。なくなってしまった大きな原因として、指導者の高齢化と少子化による参加生徒の減少があげられました。この解決策の一つの手段として、卒業生が小学生に行事の楽しさを伝え、実際にお囃子を教える事を考えました。そこで卒業生に話を聞いたところ、全員がやりたいと言ってきて、なくなってしまった行事も人々に必要とされなかったのではなく、復活を願う声はまだ残っていました。

2 一時上臈について

私は屯倉天王夏祭と津島神社で稚児として神楽を舞いました。この行事は、稲沢市では「一時上臈」、津島神社では「烏呼神事」と、異なる名前と呼ばれている事がわかりました。なぜこれが三宅と津島で二回行われているのか、なぜ名前が異なるのか、疑問が尽きず、今回の研究では解明することができませんでしたがとても興味深いことだったので、今後さらに研究していきたいです。



屯倉村祭囃子が行われていた屯倉社

今後の課題

地域行事というのは、地域のコミュニティの場であり、地域の人々の結束力を高めることができます。少子高齢化によりその地域行事が衰退している地域では、過疎化が深刻化しています。地域行事を継続する解決策として、都市部の人々やインバウンドなど他者の関心を得て、担い手を増やすことを考えました。今後は地域行事を含めた、地域の良さを他者に発信するための手段を考え、行動に移していきたいと考えています。今回の研究では、新しい事を行い今までとは違う世界に足を踏み入れる新鮮さや、楽しさを知ることができました。今後またたくさんのことに挑戦し、自分の視野を広げていきたいです。



当時の様子

集落の調査 ―福岡県糸島市王丸集落―

福岡県立修猷館高等学校 3年
谷 口 生貴斗

応募の動機

往時の半数ほどに人口が減少し、私がかつて通った文教場も閉校になるなど、過疎の進む地域の現状を目の当たりにして、一刻も早く、古くから伝えられてきた文化や民俗を後世に残すための記録を作らねばならないとの思いに駆られ、平成30年の秋から集落の調査を始めました。夏、完成した調査報告書を地域の人たちに読んで頂いた際に「どこかに提出したがよかつちなかね？」と言って下さったため、本コンテストに応募しました。

研究レポート内容紹介

福岡県糸島市王丸集落は、福岡県西部の脊振山麓に位置する、人口120人余りの小さな山村集落です。私は、集落を様々な面から調査したいと考え、民俗篇に史料篇、歴史篇を加えた集落調査報告書の作成を行いました。

民俗篇は、周辺の市町村が作成した民俗調査報告書や『民俗調査ハンドブック』、『民俗資料調査整理の実務』を参考にして、事前に質問を設定した上で、延べ20時間を超えるお年寄りへの聞き取り調査を中心に、民具調査や小祠・旧跡を巡る実地調査を実施し、調査結果を分類・整理したものです。衣食住、生産、交易、社会生活、信仰、人生儀礼、年中行事など様々な項目で、多くの民俗事象やその由来、変遷が明らかになりました。今でも続く行事や風習には、実際にいくつか参加させてもらいました。

史料篇は、福岡県立図書館や福岡市総合図書館が所蔵する江戸時代の地誌などの文献から、近世以降の集落に関する記述を抜粋したものです。戸数や人口、石高の変化や、今はない仏堂が存在していたことが判明しました。また、集落の家々に古文書の所蔵があるかどうか確かめたところ、5軒の民家と公民館から古文書を発見するに至ったため、一部は目録を作成し、民俗に関する記述がある数冊の古文書を解説しました。

歴史篇では、文献資料をもとに、江戸時代の寺子屋から現代の文教場に至る地域の教育史を研究するとともに、聞き取り調査の段階で明らかになった「伊能忠敬の腰掛石」と呼ばれる石について、伝承が生まれた背景を古文書の記述や所在地から考察しました。

調査報告書は、原稿を集落の人たちに読んでいただき、訂正・加筆を加えた後、印刷して、協力して下さった方々に配りました。



王丸集落遠景



神社の「神待ち」行事



古文書調査

今後の課題

今回は、私の住む一つの集落を調査したに過ぎません。日本各地に残る多種多様な民俗は、地域の風土に根ざして、名も無き人々が長い間育み、培ってきた貴重な遺産であると思います。いずれ、受け継ぐ人が消え失せていくであろうそれらの民俗を、せめて記録という形だけでも、後世に残していけるように、まずは周辺の集落から徐々に調査地を拡大していきたいです。調査を進めて、比較研究を行うことで、それぞれの集落や地域の民俗の特徴が明らかになり、その背景を探ることも可能になると考えます。微力ながらも、調査を続けていきたいと思っています。

地域文化研究部門選評

國學院大學教授 大石 泰夫

■総評

地域の伝統文化に学ぶコンテストの趣旨は、高校生たちが自分たちの周辺に継承されている「伝承文化」に、自主的に目を向けて課題を決め、その内容を実地で調べたり、体験的に学んだりしてレポートとしてまとめる。そして、それを進めることによって高校生たちが、地域文化の実態とその存在の意味を捉え、地域文化の今後のあり方を考える、という視点から特に優れたものを顕彰して、こうした取り組みの質を高め、活発化してゆこうというものです。

では、どういう評価基準で取組やレポートを評価するのかというと、

1. 問題発見や着想の上での独自性
2. 情報収集の上での直接性や確実性
3. 情報整理の上での論理的工夫や努力の跡
4. 立論の手順における論理的実証性
5. 結論としての新たな知見の明確性

というようになります。

身近な伝承文化を発見するということについて、今回の応募作の多くはそうした観点から出発していて、高く評価できました。

評価が大きく分かれたのは、「2」「3」で、文献調査において歴史や伝承の調査を行った上で、フィールドワークを実施して、そうした伝承文化を実感するとともに伝承者の思いを受け止めて考えられているかどうか、ということでした。伝承文化は生き物です。過去において消えてしまったのであるなら、それは何故なのか。今も伝承されているのはどうしてか。そういう問いに基づいた新たな知見につながる取組が、高く評価されたということになります。現代はネット情報で相当詳しい情報を入手することができます。しかし、人が続けている伝承文化は、肌で感じて具体的に立論したものであることが大切なのです。

また、こうした基準は、一般的な研究成果にも敷衍できるものです。これからも、このコンテストに限定されるのではなく、この1～5の評価基準を参考にし

て、このような実際的な学問探究が若い人たちによって積み重ねられてゆくと、学問の将来も大きく開けていくでしょう。

みなさんのさらなる研鑽を、心から期待したいと思います。

■団体の部

最優秀賞

「イチイからたどる「飛騨のなりたち」 ―飛騨の伝承文化に学ぶ―

岐阜県立益田清風高等学校

地域研究

飛騨の成り立ちを「飛騨と中央との関係」から読み解こうと、伝統工芸一刀彫の材料であるイチイを基軸にして多角的に調査し、詳細にその成果をまとめています。

イチイは岐阜県の県木とされていますが、イチイは「一位」で、この材で作った笏により天皇から正一位の位を授かったという伝承を知ったことをきっかけにして、古典籍に伝えられる「両面宿禰」（『日本書紀』）「飛騨国の馬の献上」（『続日本紀』）「飛騨工」（『今昔物語集』）、現在に伝わるイチイの一刀彫りと中山和紙の技術を、文献調査において歴史や伝承の調査を行った上で、丹念なフィールドワークを実施して調査したレポートです。

文献を丹念に押さえた上で、現在に伝承される文化を体験することで、飛騨の独自の文化が中央とのかかわりの中で特色づけられて伝承されていることが、実感を伴って良くまとめられています。

優秀賞

「知られざる深良用水の恩恵 ～深良用水の恩恵は深良（裾野市）だけではなかった。～」

静岡県立沼津城北高等学校

情報メディア部 用水班

深良用水（ふからようすい）という藩政期に作られた灌漑用水の効用を、信仰行事に至るまで詳細に調査してまとめています。

沼津城北高校の生徒の七割が、小学校から知っている芦ノ湖を水源とする深良用水。その実態についてを調査したのですが、この用水による水の管理運営の

ためのあり方がよく調査され、水を芦ノ湖から引くということから生じる箱根神社への信仰、必要な文書を保存管理していくための年中行事「虫干し会」の参与調査もレポートには詳細に報告されています。

優秀賞

「出雲の神話が語ること」

東京都・香蘭女学校高等科

出雲研修

出雲神話について文献の調査と、神社や考古遺跡を中心にしたフィールドワークのレポートを詳細にまとめたものです。

高校生が研修旅行（修学旅行）に行く機会は、ほとんどの生徒にあるのではないのでしょうか。このレポートはそうした研修旅行を行う上で、事前の調査、旅行時のフィールドワークのあり方などが高く評価できるものとなっています。出雲地方は出雲神話のふるさとであり、考古遺跡も豊富にあります。したがって、研修旅行には理想的ですが、この取組では外国人である小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が見た出雲についての一節を設け、外国人の記述をも視野に入れた研修を行っています。地域の伝承文化というものが、外部の人にはどのように見られるのかということも、大事な視点です。

佳作

「幻の甚目寺飛行場 ～戦後74年目証言を聴く～」

愛知県立杏和高等学校

歴史研究グループ

太平洋戦争時に地域に存在した飛行場の記憶を、当時の新聞等の記録及び当時を知る古老からの詳細な聞き書きを記録したものです。レポートとしての筆力が優れています。

扱ったテーマは、近代のある地域の歴史の一齣を、当時を知る人たちからの聞き書きによって掘り起こすというもので、伝承文化として扱うべきものなのかということ自体が問われることかも知れません。しかし、伝承文化とは、調査時現在まで残っているものばかりを対象とするものではありません。なくなってしまったものは何故なくなったのか、そのことによって何を学ぶことができるのか、ということも重要なテーマな

のです。

佳作

「因幡の手笠踊りについて」

鳥取県立八頭高等学校

因幡のカサ踊り研究会

手傘踊りについて調査をまとめたもので、あまり長いレポートではありませんが、問題意識が鮮明で、従来の通説を明確に否定するなどレポートとして優れています。

因幡地方の傘踊りの手傘を使う雨乞い踊りに由来するとする通説に対して、手傘踊りと雨乞い踊りの芸能の違いを指摘し、一方同様の比較から手傘踊りは山形県尾花沢市の花笠踊りと共通性があることを論じるとともに、伝承者の意識も取り入れて、その関連性を論じていて、結果として通説の見直しを主張しています。

■個人の部

最優秀賞・折口信夫賞

「民具を活用したレクリエーションが参加者に与える影響」

鹿児島県立屋久島高等学校

中島 渚

屋久島の民具の重要性を調査するとともに、それを島民に認識してもらう試みとして、現在使用されなくなった民具を用いた回想法を盛り込んだレクリエーションを行って、その効果を検証しています。

「民具」というような概念は、高校までの教育課程の中にはあまり大きく位置づけられていません。このレポートでは先行研究を踏まえつつ、30年前に行われた調査以降、大量生産・大量消費・大量廃棄の時代に民具がどのようになったのか、ということを根本的な問いとして発しています。そして、使われなくなった「民具を用いての回想法」（回想法は認知症の予防や治療で注目されている）として、民具のレクリエーションを実践し、その効果の検討を行うというレポートとなっています。

レクリエーションの内容は、民具の紹介、民具についてのクイズ、思い出のある民具について語ってもらうというような内容で、これについてのアンケートを合わせて行っています。

結果としては、多くの民具が失われつつある現状が明らかになり、レクリエーションについては高齢者にとっても高校生にとっても好評であったことが報告されています。

今回の取組によって、企画者側の意識はもちろん、参加者にとっても民具を意識づけることになったと思われる。

優秀賞

「高田富士考 ―新宿区のともしび 地域性を追いかけて―」

東京都・東洋高等学校

八木 つきの

新宿区内の富士講を調査対象として、現状の富士講の聞き取り調査を含め詳細に調査したものです。

新宿区に住む高校生が、地域に伝えられる富士講という江戸期以来の信仰に注目して、文献調査と先行研究を丹念に調べています。

そして、水稻稲荷神社境内にある1779年に作られた富士塚である高田富士を実地調査して、富士講の現状についての聞き書き調査を行ってレポートしています。

優秀賞

「白雲座の地歌舞伎 ～地域の伝承文化を学び、受け継ぐ～」

岐阜県立益田清風高等学校

田口 真江

下呂市門和佐の白山神社境内にある「白雲座」と呼ばれる芝居小屋は、藩政期から地芝居の舞台として現

在まで機能していますが、その白雲座の現状と歴史等を、聞き書きを交えて詳細に調査報告したものです。

この白雲座は回り舞台が設置されていて、国指定重要有形民俗文化財に指定されていますが、現在でも地歌舞伎が上演され続けている劇場です。その上演状況の全体像と、一つの演目を演じるための稽古から本番までが詳細にレポートされています。

佳作

「地域行事の継承の問題とこれから ～屯倉村祭囃子の研究から創る地域の未来～」

愛知県立杏和高等学校

熊沢 咲良

自らが参加した地域の祭りと芸能の記憶をたどりながら、文献調査と現状の状況をフィールドワークで調査し、今後の継承の課題をまとめています。

具体的には稲沢市平和町三宅に伝承される屯倉村囃子を、小学校から中学校にかけての4年間演じた記憶を元にこれを振り返って調査、レポートしたものです。

佳作

「集落の調査 ―福岡県糸島市王丸集落―」

福岡県立修猷館高等学校

谷口 生貴斗

詳細な集落の調査報告書で、「民俗編」「歴史編」「史料編」「地名編」（地名編は未提出）からなっています。民俗編については自治体などが行う集落の総合的な民俗誌の報告書の形に習っているものです。「史料編」は古文書の翻刻となっていて、総合的な報告書として高く評価できます。

地域文化研究部門選評

国立歴史民俗博物館 名誉教授 常光 徹

■団体の部

最優秀賞

「イチイからたどる「飛騨のなりたち」 ―飛騨の伝承文化に学ぶ―

岐阜県立益田清風高等学校

地域研究

グランド脇で見かけるイチイという木に注目し、そこから広がる飛騨の歴史と文化を描き出した力作。「両面宿禰の伝説」「飛騨の馬と紙絵馬」「飛騨工」「イチイと一位一刀彫」「飛騨河合と山中和紙」の5つのテーマを設定し、グループごとに現地調査を行い、関連する史資料をもとに課題を掘り下げて考察している。一見、異なるかに思える各テーマだが、イチイを軸に有機的で多様なつながりの輪を形成していることを発見し、相関関係を提示した点が大きな成果である。また、関係者からの聞き書きと今後の活用法は、今日的な課題を浮き彫りにしていて示唆に富む。

優秀賞

「知られざる深良用水の恩恵 ～深良用水の恩恵は深良(裾野市)だけではなかった。～」

静岡県立沼津城北高等学校

情報メディア部 用水班

1666年から4年の歳月をかけて完成した深良用水(箱根用水)の水は、一体どこまで流れているのか。この疑問を解くには、田畑に引く水の分配や水門(堰)の設置など、用水をめぐる地域の人々が歩んできた生活の歴史への視点が欠かせない。地元に残る文書を読み解き、現地を歩きながら課題に迫っている。深良用水の名称から裾野市深良のイメージがつよいが、実際には長泉町や清水町にまで及んでおり、水の利害をめぐる厳しい状況にあったこの地域が、用水の恩恵が最も大きかったとの指摘は興味深い。

優秀賞

「出雲の神話が語ること」

東京都・香蘭女学校高等科

出雲研修

授業で学んだ『古事記』の学習から芽生えた疑問や関心をもとに、出雲にゆかりの神話、神社、遺跡をはじめ、文学者の小泉八雲について調べた成果をまとめ

たもの。事前の調査が実に周到に準備されている。それぞれが、興味をもったテーマについての課題が明確に示されており、現地での研修によく生かされていることがわかる。それは「実際に現場に行って実物と向き合い、自分の知識を整理することの大切さを私たちは今回の出雲研修で学んだ」という言葉に表れている。

佳作

「幻の甚目寺飛行場 ～戦後74年目証言を聴く～」

愛知県立杏和高等学校

歴史研究グループ

アジア太平洋戦争末期につくられた甚目飛行場(清州飛行場)は、現在、ほとんど忘れられた存在といえてよい。メンバーは新聞記事や地図、写真などを駆使して、飛行場建設の事情や当時の様子、今日までの移り変わりの姿を明らかにしている。なかでも、終戦当時旧制中学校の生徒で、飛行場での労働に従事した4人の男性からの聞き書きは、体験者の話だけに真に迫る内容で充実している。まとめるにあたっては、地元の歴史民俗資料館の学芸員の方のアドバイスが大きかったことがわかる。

佳作

「因幡の手笠踊りについて」

鳥取県立八頭高等学校

因幡のカサ踊り研究会

因幡の手笠踊りの起源について考察したものである。最初に、山形県の花笠踊りが伝えられたのが始まりとする説と、雨乞い踊りに由来するという二説を紹介する。その上で、文献、聞き書き、踊りの動作の比較といった作業を重ねた結果、手笠踊りは、山形県尾花沢市の花笠踊りと因幡の傘踊りの影響のもとに成立したと結論づけている。傘踊りとの関係では共通する言葉の使用や合図にホイッスルを用いる点、花笠踊りの場合は「笠まわし」と呼ばれる動作が双方に見られることを指摘して説得力に富む。

■個人の部

最優秀賞・折口信夫賞

「民具を活用したレクリエーションが参加者に与える影響」

鹿児島県立屋久島高等学校

中島 渚

屋久島の人々の生活を支えてきた民具は、現在どのような状況にあるのだろうか。使われなくなった民具を有効活用する方法はないのか。屋久島歴史民俗資料

館などの協力を得て実施したアンケートや、高校生と高齢者によるレクリエーションの結果を分析し考察した力作である。多様な民具のなかでも、日常の身近な生活の場で使われてきた民具ほど認知度が高いことがわかる。また、民具を活用したレクリエーションが、高齢者の記憶を生き生きと蘇らせ、若者との交流のきっかけの場になったとの指摘は示唆深い。民具の保存と活用は、これからの大きな課題である。

優秀賞

「高田富士考 ―新宿区のともしび 地域性を追いかけて―」

東京都・東洋高等学校

八木 つきの

新宿区における富士講、富士塚の実態、とくに高田富士の現在の状況について現地調査をもとに明らかにしたものである。まず、富士講および富士塚の歴史と組織の特徴について、主に文献を用いて整理し、その要点を実に手際よくまとめている。7月の富士祭り(山開き)に行なった調査の報告では、丸藤宮元講社の先達である井田三郎氏からの聞き書きが印象深い。富士講の組織の高齢化や先達の後継者問題など、現在の高田富士がおかれている厳しい現実を的確に伝えている。

優秀賞

「白雲座の地歌舞伎 ～地域の伝承文化を学び、受け継ぐ～」

岐阜県立益田清風高等学校

田口 真江

下呂市門和佐の白雲座で行われる地歌舞伎について、その歴史と現状を田口さん自身の体験を踏まえてまとめたもの。関連する文献に目を通し、白雲座が現在の姿になるまでの歴史的な移り変わりを、関係者からの聞き書きを交えて解説している。構成がしっかりしている。内容がわかりやすいのは、写真や図の効果的な利用もあるだろう。平成30年度公演「新版歌祭文 野崎村」の記録は、田口さんが出演した舞台だけに、練習風景や本番前の緊張感が手に取るように描かれていて印象的である。

佳作

「地域行事の継承の問題とこれから ～屯倉村祭囃子の研究から創る地域の未来～」

愛知県立杏和高等学校

熊沢 咲良

熊沢さんが中学三年生のとき、屯倉夏祭り（稲沢市）

の囃子が中止になった。なぜ終わってしまったのか。子どもの頃に神楽を舞い祭囃子に参加した体験をもとに、祭りの歴史と民俗、そして囃子を維持するのが困難になった経緯と今後の展望についてまとめたものである。また、津島神社（津島市）の神事に参加した経験を振り返って取り上げた「一時上臈」と「烏呼神事」は、民俗的な背景がよく調べられていて読み応えがある。添付資料も充実しており、さらなる論究が期待される。

佳作

「集落の調査 ―福岡県糸島市王丸集落―」

福岡県立修猷館高等学校

谷口 生貴斗

糸島市の王丸集落で一年間に亘って行った民俗調査の報告を核に、「史料篇」「歴史篇」を加えてまとめたもの。民俗の広い領域を一人で調査し、さらに関連する史資料の収集は容易ではなかっただろう。継続して取り組んだ努力の賜物である。資料の報告が中心だが、そのなかで「続・伊能忠敬の腰掛け石伝承について」の考察は、江戸期の文書を用いて伝説の背景を推測した内容で興味深い。今後、王丸集落の民俗世界を、歴史を踏まえた多面的な視野から生き生きと描く研究を期待したい。

■総評

読み応えのある充実した内容の作品が揃いました。取り上げるテーマも、民具、神話、祭り、信仰など多彩です。団体の部最優秀賞の益田清風高等学校「イチイからたどる「飛騨のなりたち」―飛騨の伝承文化に学ぶ―」は、身近にある一つの植物の背後に、地域の歴史と文化が多様な姿で広がりつながっていることを発見した作品で、グループ研究の総合力が発揮された例といえるでしょう。個人の部最優秀賞中島渚君の「民具を活用したレクリエーションが参加者に与える影響」は、アンケートの実施や高齢者との交流を通して得られた成果で、課題に取り組む積極的な活動が光っています。民俗学の根底には、私たちの目の前にある疑問や関心が横たわっています。伝承といういとなみに注目しながら、歴史的な移り変わりの姿や、そこにこめられた人々の知恵・技術・心意などを明らかにしていくところに特徴があります。これからも、身近に生起する話題に関心をもって取り組んでください。